

小田壽典著

佛説天地八陽神呪經一卷

トルコ語譯の研究¹⁾

橘 堂 晃 一

近年の古代トルコ語佛典研究の進展には目をみはるものがある。デジタル画像ならびに佛典テキストデータベースの利用によって、零細な資料であっても、その内容を特定する可能性が格段に広がった。一九九七年の段階でエルヴェルスコグ氏によって把握されていたトルコ語佛典の數と種類は、今となつては大幅に補足する必要がある²⁾が (Johan Elverskog, *Uygar Buddhist Literature, Silk Road Studies 1*, Turnhout, 1997) 増補する間にも新資料の數は増していくにちがいない。

これまで知られていなかった新たな佛典を見出すことは、研究者にとっては知的喜びを覺える瞬間であり、その積み重ねが、ウイグル佛教の裾野の廣がりを示してきたといえる。その一方で、一つの典籍に對する徹底的なテキスト校訂もまた、ウイグル人が佛教を受容していく過程で、言語の變化や教義理解にきたした變容を知る大きな手掛かりとなる。

本書が對象とするトルコ語「佛説天地八陽神呪經」(以下「八陽經」とする)は、後者を代表するテキストである。トルコ語

「八陽經」には多くの斷片から複数のテキストの存在が確認されており、本經が天山山脈東麓に移り住んだウイグル人たちの間で長期間にわたつて愛好されたことを物語っている。

トルコ語の原典となつた漢文「八陽經」は七世紀後半から八世紀前半、中國において撰述された偽經である。如來藏、中觀、唯識、密教といった大乘教義のエッセンスをちりばめ、さらに道教や民間信仰をも取り入れて佛教の民衆化に果たした役割は、近年積極的な評價を受けている(木村清孝「偽經「八陽經」の成立と變容」、『東方學會創立五十周年記念東方學論集』、一九九七年、四七三―四八六頁)。

そもそもトルコ語「八陽經」の研究は、羽田亨の「回鶻文の天地八陽神呪經」(『東洋學報』五卷一、二號、一九一五年、四一―七三頁、『羽田博士史學論文集』下卷、一九五八年に再録)を嚆矢とする。これは大谷探檢隊將來にかかるトルコ語寫本を『大日本續藏經』所收の「八陽經」であることを突き止めたものであり、大谷探檢隊の一員であつた橘瑞超のトルコ語「觀無量壽經」の研究とならんで、我が國のチュルク文獻學を切り拓いた研究として記憶されている(庄垣内正弘「羽田亨とウイグル語文獻の研究」、『古代文化』五〇號、一九九八年、五〇頁)。

羽田の研究の後、敦煌やトルファン出土資料中からも「八陽經」が見出された。これらはバング、ガバイン、ラフマティ(アラト)らによつて發表されている(W. Bang, A. von Gabain, G. R. Rachmat, *Türkische Turfantexte. VI, Das buddhistische Sutra Sakiz yulnamak*, Berlin. In: SPAW. Phil.-hist. Kl. 1934, pp. 93-192)。敦煌本(Or. 8212.104)を底本と³⁾トルファン出

土の断片資料によって校訂したものである。トルコ語「八陽經」の研究は、大谷探検隊將來資料（京都本）と敦煌寫本（ロンドン本）を中心に進められてきた。

そしてこの度、我が國のチュルク文獻學にとって記念すべきの佛典が、小田壽典氏によって全面的に見直され、『佛說天地八陽神呪經一卷 トルク語譯の研究』として結實したことは、斯學の慶びとするところである。小田氏の研究は、羽田の研究を繼承しつつ、佛敎文獻という固定觀念にとらわれることなく、緻密な校訂作業によって導き出された歸結として、ウイグル佛敎史の新たな一面を提示することに成功している。その意味において本書は、庄垣内正弘氏のアビダルマ文獻研究とならんで、トルコ語文獻研究の到達點を示すものといえる。

京都本、ロンドン本、この二つの寫本は、どちらも完本に近い状態を留めているにも関わらず、テキスト間で異同が大きく、問題の多い資料であった。リゲティによってトルコ語譯に二種類の表題があることが指摘され、はじめてその課題が具體的に認識されたこと（L. Ligeti, *Autour du Sûtra yûknuq yanuq, Sûtra Turrica, Akadémiai Kiadó, Budapest, 1971, pp. 291-319*）。小田氏は、リゲティの問題提起を承けて、バンガラの研究では行われていなかった京都本とロンドン本との比較を通じて、新たな問題を提起した。それが「トルコ語本 八陽經寫本の系譜と宗教思想的問題」（『東方學』第五五輯、一九七八年）である。小田氏は、この論考において、初期のトルコ語佛典の中にイラン的二元論を背景とする表現がみられることをはじめ指摘した。それ以後も「八陽經」をテーマとする論考を数多く發表されており、ト

ルコ語「八陽經」の研究が、小田氏の研究の中核をなしている。トルコ語「八陽經」そのものは、『阿毘達磨俱舍論實義疏』や『金光明最勝王經』などと比べると、決してポリュームのある方ではない。しかし、小田氏の表現を借りれば、「言語文化史的變遷」の痕跡が、本經の全容解明を困難なものにしていた。この問題を闡明することに心血を注ぎ結實したのが本書である。

本書では、これまでに確認されていた「八陽經」資料に加えて、ベルリン、京都、パリ、サンクトペテルブルク、北京の關係機關の所藏資料が網羅されている。ベルリン資料については、上記バンガラの研究以降、P・ツイーメ氏や小田氏らによって新たに同定された資料も加えられる。京都、すなわち龍谷大學所藏資料については小田氏が積極的に報告してこられた。またサンクトペテルブルク資料についても、すでに『東洋文庫所藏 St. Petersburg ウイグル文字・ソグド文字・マニ文字寫本マイクロフィルム假目錄（第一稿）』（二〇〇二年）のなかで同定されていた情報に加え、小田氏自身に見出された資料も数多く含まれる。とくにベルリンや書道博物館の「八陽經」資料が、サンクトペテルブルク資料と接合する例を見出した功績は特筆される。本書ではこれらが系統的に分類され、トルコ文の校訂テキストとその和譯および漢文テキストが、著者の緻密かつ周到な配慮によって提供される。

本書は「研究編」と「圖版・資料編」の二部冊から成っている。各編の構成は次のとおりである。

「研究編」

凡例

はじめに

序説

研究編

第1章 總論

第1節 序、並びに經典復元の課題

第2節 經典の課題

第3節 トルコ語の課題

第2章 トルコ語校定稿本

第1節 トルコ語校定稿本（校異・邦譯・原典對照）

第2節 トルコ語注釋書資料

第3節 トルコ語識語資料

第4節 佛教語とトルコ語の注

第5節 トルコ語彙と接辭の索引

第6節 寫本・版本諸表

第3章 現存八陽經資料

第1節 諸資料の目録

第2節 諸資料の比較對照表

文獻目録・地圖

「圖版・資料編」

解題と表示

資料の解説

ローマ字轉寫テキスト Text I-Text 227

圖版（ウイグル文）

圖版（漢語寫本）

一

冒頭で、一般の讀者のためとして「序説」を設け、トルコ民族の歴史、言語、古トルコ語佛教文獻が俯瞰された後、漢文「八陽經」の内容が簡単に紹介される。

續く第一章「總論」では、第2章で提示されるトルコ語校訂テキストに對する解説が、著者がこれまでに發表してきた諸論考をもとに簡潔にまとめられる。従つてここではそれらも適宜参照ながら紹介することにしたい。

まず「第一節」ではトルコ語「八陽經」研究の課題が提示される。前述のとおりトルコ語「八陽經」は寫本の種類が多く、テキスト間に多くの異同が認められていた。小田氏の功績はこれらを四種類のテキストに集約した点にある。「圖版・資料編」の冒頭では、本書で扱われた全ての資料が、四分類のそれぞれにどの資料が含まれているかを、古文書學的基礎情報とともに示されている。これだけ多くの斷片を四種類に集約するために費やされた時間と努力を想像するだけでも、頭が下がる思いである。

小田氏は「八陽經」のトルコ語表題の相違に着目し、大きく初譯本（Ⅰ）と改譯本（Ⅱ）に分類する。初譯本と改譯本のトルコ語表題は次のとおりである。

(Ⅰ) *ingri bur-xan yrlqamış ingrili yrti sâkiz yekmâh yarua biğüling arevîş nom biing bir tûğzinê*

天たる佛陀が説きたる天と地と八集光なる神祕の呪經一卷
(Ⅱ) *ingri ingrîsi bur-xan yrlqamış ingrili yrtiua sâkiz tûlugin yarumîş yalvrtmîş tûğ daru tana yip alby sudur nom biing bir*

1432m

天の天、佛陀が説きたる天と地とに八種をもつて光輝きたる聖呪、「墨糸」と名づける經典一卷

初譯本（Ⅰ）の系統には、前述したロンドン本と京都本とがあり、それぞれⅠaとⅠbと分類番號が與えられる。改譯本（Ⅱ）の系統には、トルファン盆地を中心に出土した寫本群と版本がこれに分類される。これらにもテキスト分類を示すⅡcとⅡdという分類番號が與えられる。以下、小田氏の説明に基づき4種のテキストの特徴を簡単に示しておく。

ロンドン本（Ⅰa）は四分類中、最古層に位置づけられる。その理由は、言語的特徴（n方言）に加え、マニ教的善惡二元論が看取される点にある。周知のとおりウイグルは、七六三年、牟羽可汗の時にマニ教を國教とした。西遷後、佛教へと改宗する過程で、マニ教的表現を借りて佛教教義の理解に努めようとしていたことを示している。つまり小田氏は、ロンドン寫本をその過渡期に生まれたテキストと考える。

京都本（Ⅰb）は、僅かの誤寫や脱落を除けば、ロンドン本とほとんど同一のテキストであり、小田氏はこれを（Ⅰa）の異寫本とみなす。ただし一部には意圖的な文意の變更もみられる。

Ⅱcに配當される寫本斷片の資料は數が最も多く、一〇〇種類の寫本とその他の斷片により、全體のテキストを復原できるといふ。なおⅡcにはウイグル文字以外にブラーフミー文字とチベット文字によって表記されたトルコ語資料も含まれている。また敦煌四六四窟（ペリオ編號一八一窟）からもたらされた寫本の一部がⅡcに分類される點は注目される。

Ⅱdは版本資料である。數はそれほど多くはなく、二種類の版式が確認されている。一つは刻工の名に因んで「陳寧刊」、もう一つは施主の名に因んで「ドルジ・ダルガチ施主本」と稱される。先行研究が指摘するとおり、印刷された時期は、いずれもモンゴル時代に属している。

第2節「經典の課題」では、トルコ語「八陽經」の位置付けが試みられる。

まずトルコ語譯とその他の譯本との関係が考察される。すでにモンゴル語譯とトルコ語譯とを比較し、モンゴル語譯がトルコ語譯から影響を受けたことを指摘するリゲティ（前掲書）の研究があるが、本書は漢語、チベット語、モンゴル語、さらに西夏語斷片資料（三三四頁に西夏語資料の詳細が記される）も加えて総合的な「八陽經」比較が試みられる。その詳細は、第3章第2節「諸資料の比較對照表」に示されており、「八陽經」のテキスト間の異同がビジュアルに判斷できるように工夫されている。

諸本の比較において、とりわけ漢語「八陽經」の分析は詳細を極める。續藏經と敦煌寫本（二二五點）に加え、藏漢對音資料（p. 1268）、中國寫本（靜古本）、李氏朝鮮版本、越南本、東寺觀智院本系統寫本が比較に供される。經文を任意に抽出し、それが各本の中で現れる順位を検討し、さらに八カ所の異同の多い經文を比較し、「八陽經」に三つのグループがあつたことを明らかにする。

小田氏が特に注目するのは第一のグループである東寺觀智院系統の寫本である。これは十四、十五世紀頃の寫本とみられているが、正倉院文書は「八陽經」がすでに八世紀中葉には傳來してい

た可能性を示唆しており、観智院本がその系統を傳承している可能性があるという。敦煌寫本 S・五〇〇（小田氏はこれを敦煌（B）本とする。S・五〇〇以外の全ての敦煌寫本は（A）本とされる）は亂雑に書寫された斷簡であるが、観智院本の系統に屬すという。さらに藏漢對音資料もこれに含まれる。これが観智院本のテキストに近いことは高田時雄氏によって夙に指摘されているところである（『敦煌資料における中國語史の研究』九、十世紀の河西方言——、創文社、一九八八年、二九—三二頁）。このグループに屬するテキストが、日本、敦煌、トルファンから発見される事實は、同じ時期に中原を中心として同心圓狀に傳播していった狀況があったとし、「八陽經」の祖本に近い形を傳えていると指摘する。そしてトルコ語「八陽經」はここに分類される。

トルコ語に翻譯されるにあたって參照された寫本の系統が明らかにされたことは重要な意味をもつ。ただし想定される（B）本類の漢語原典が、敦煌寫本では斷簡の一點のみであり、それ以外はすべて別系統である敦煌（A）本類に屬すという。近年、注目を集めている杏雨書屋には敦煌寫本「八陽經」九點（『敦煌祕笈』目錄冊、武田科學振興財團、二〇〇九年）、またロシア所藏敦煌寫本でも確認されているようなので、將來、トルコ語本の原典と想定される（B）本類が、完本に近い状態で發現することを期待したい。

また「八陽經」がトルコ語に翻譯された地域は、トルファン地域以外にはありえないとみる小田氏の見解に従えば、トルファン地域で發掘された漢語「八陽經」資料は重要である。しかし現存する資料はいずれも零細であり、残念ながら利用できるものは少

ない。小田氏はこれらも精力的に調査している。

ところで、ロシア所藏資料中にウイグル佛教徒が書寫したと思われる漢字五行（一〇行分のウイグル文も書寫される）を保存する斷片（SI 4b Kr.14）がある。庄垣内氏は、これらの漢字が「八陽經」にみえる難字と、それに對する音注であること、さらにそれらがウイグル漢字音を反映していることを見出された（庄垣内正弘「ロシア所藏ウイグル語斷片の研究」、『京都大學言語學研究』第二〇號、二〇一〇年、二四三—二七七頁）。元代のウイグル佛教徒はトルコ語によってその内容の把握に努める一方、日常の儀禮においては、ウイグル漢字音で本經を讀誦していたのであろうか。言語學的にも、また佛教文化史の觀點からも興味深い資料である。

つづいてトルコ語譯内部で起こったテキストの變容が考察される。小田氏がロンドン本をトルコ語譯の祖形に近いものと考え、京都本をその派生とみることにについては既に述べた。ロンドン本にマニ敎的表現が看取されることが、その理由の一つであった（前掲の小田一九七八論文）。マニ敎研究者には好意的に受け止められる一方、レールボルン氏は小田氏とは逆に京都本からロンドン本が派生したと見て、マニ敎的表現についても慎重な態度をとる（K. Röhren, Zum manichäischen Einfluß im Altürkischen Buddhismus, *Studia Manichaica. IV. Internationaler Kongreß zum Manichismus*, Berlin, 14-18. Juli, 1997, 2000, 494-499）。これを受けて小田氏は「トルコ語『八陽經』のマニ敎的表現について」（『豊橋創造大學紀要』五、二〇〇一／二〇〇二、一一—一二頁）を發表し、レールボルン説に對する反證を詳細

に列挙しており、レールボロン説はもはや成立しないであろう。本書では、トルコ語寫本の系譜を明らかにすることに重點が置かれているため、上記論文の方が、反證のための論據がより丁寧に解説されている。したがってこの問題に興味ある讀者には、この論考と併せて本書を読まれることを薦めたい。

マニ教の影響を明らかにした小田氏の論考を読み、あらためて「八陽經」のテキストを読む過程で、評者には以下の點が興味深く感ぜられた。「光明」はマニ教を特徴づける要素の一つであるが、日天と月天が、八陽經原典よりも視覚的に表現されている。例えば原典「背日月之光明」は、ロンドン本・京都本ともに「日天・月天、二つの光の宮殿の内にある諸天の光に背を向けて（ロンドン本二七二―二七三行）」（小田前掲論文六頁）と翻譯される。評者は最近発見された「マニ教宇宙圖」に描かれた日天と月天の表現を想起する（吉田豊「新出マニ教繪畫の形而上」、『大和文華』一一一號、二〇一〇年）。畫面上部の左右に日天と月天が描かれており、圓形は複數の門を備えた火と水の壁によって仕切られ、その中に日天、月天そして天使たちが配され、門からは光明が放たれている。この繪畫は中國南方のマニ教徒たちによって制作されたものであるが、トルファンにも同じような宇宙圖があった可能性が指摘されている。日天・月天を詳細に描寫する佛典（例えば『起世經』卷第十など）からではなく、視覚的なイメージから生み出された表現ととらえることもできるのではないだろうか。

第3節では、「八陽經」の初譯本（Ⅰ）と改譯本（Ⅱ）にみられる言語上の特徴を比較し、エルダル氏によって前古典期（Pre-

Classical）分類される古層の言語特徴を抽出する。①奪格 + *da*, + *dan* から + *dan* への變化。②具格の四重變化 + *Xn* から二重變化 + *ln* への變化。③後置詞 (*izin*) の前の第三人稱所有接尾辭 + *(s)ln* (對格) から + *(s)l* (主格) への變化を擧げる。さらに後期的指標となる特徴として音位轉換を確認する。(例) *qutul* → *qutun*。 「救われる」。また初譯本と改譯本の間では異なる語彙が使用されている箇所があり、それを列挙する。(例) *sekid* / *sekid* 「膝をつかせる」など。さらにサンスクリットに起源する借用語について、初譯本ではソグド語を仲介した語形のみが確認されるが、改譯本ではトカラ語を仲介した語系が現れることを確認し、初譯本（Ⅰa）がトカラ佛教の影響を受ける以前に成立したとみる。なおサンスクリットに起源する借用語の導入経路については庄垣内氏の包括的な研究がある（庄垣内正弘「古代ウイグル語におけるインド來源借用語彙の導入経路について」、『アジア・アフリカ言語文化研究』一五、一九七八年、七九―一一〇頁）。

ここで本書では觸れられていない「菩薩」のトルコ語譯をめぐる議論について紹介しておきたい。古トルコ語佛典では「菩薩」*Skt. bodhisattva* に對して *bodisat* と *bodisat* の二通りの表記が確認される。庄垣内氏は前者を音位轉換の可能性を排除して、ソグド語の複數形に由來するとみて、古い文獻の指標となることを指摘する（庄垣内前掲論文、一〇三頁）。一方、吉田豊氏は、*bodisat* の形はソグド語文獻でも稀で、ソグド語内における音位轉換によることを示し、ウイグル語でも同じ現象が起きたとする論考を近年發表した（吉田豊「トルファン學研究所所藏のソグド

語佛典と「菩薩」を意味するソグド語語彙の形式來源について——百濟康義先生のソグド語佛典研究を偲んで——、「佛教學研究」第六二・六三合併號、二〇〇七年。庄垣内説は *bodistv* → *bodistv*、吉田説は *bodistv* / *bodistv* → *bodistv* という推移を想定する。いずれにせよ興味深いのは、兩者の形がロンドン本では、ほぼ同じ比率で現れている点であり、「菩薩」の語に限っていえば、ロンドン本は過渡期にあることを示している。

小田氏は、「八陽經」にみられるこれら特徴が、ガバイン氏の分類にしたがって、*n* 言語と *y* 言語とに現れる同調性を検証し、*y* 言語の一般化が十世紀から十一世紀に起きたと指摘する。そして敦煌寫本中の古層に属する「トルコ語」がオスマン語の祖語であったとするハミルトン説を承け、「碑文言語と共通點をもつ八陽經ロンドン本や同時代的マニ教文獻は、トルファン地域における傳統的ソグド・トルコ文化のなかで育まれた文語であって、九姓鐵勒ないし移住ウイグル族の新しい佛教言語の擔い手、つまり *y* 言語の使い手とは異なるとみたい。カラハン朝以前の古層の言語がオグズ族へと伝えられて、オスマン語の言語となったのではないか」(六九頁)とし、さらに「これが「突厥語(テュルクチエ)」あるいは「突厥の言語(テュルク・ティル)」と呼ばれるものであるならば、この文語が突厥の時代より實質の意味を持った言語であったかもしれない。西突厥の言語がオグズ族に傳わりオスマン語に遺産となった」(七二頁)として、ガバイン氏の *n* 言語＝天山地方にいた「西トルコ族 (*Aryu, Qipčaq, Oguz* など)」の言語とみる説を再評價する。

小田氏の説はまことにスケールが大きく、魅力的である。しか

しながら、ガバイン氏が *n* 方言と *y* 方言を方言差とみる説に對し、これを時代差とみる見解が提出されていることは、本書でも觸れられているところである(例えば、庄垣内正弘「古代トルコ語 *n* 方言における *y*」の低母音化について)、『神戸外大論叢』第三卷第三號、森安孝夫「トルコ佛教の源流と古トルコ語佛典の出現」、『史學雜誌』第九八編四號、一―三五頁、一九八九年。實際、時代差説に有利な *n* 言語と *y* 言語の要素が混在するマニ教文獻が報告されている (George Hazai / Peter Zieme, Zu einigen Fragen der Bearbeitung türkischer Sprachdenkmäler, *Acta Orientalia, Copenhagen* 32, 1970, pp. 125-140)。とりまなお *y* ロンドン本「八陽經」そのものに、その兩方の要素があることが指摘されているが (*qanyu* が六例に對し、*qayy* は二〇回、Marcel Erdal, *A Grammar of Old Turkic, Brill*, 2004, p. 15)、『この點に觸れられていないことは残念である。またロンドン寫本の言語と西突厥の言語との關連についても、碑文資料およびオスマン語にみられる一人稱代名詞 *ban* が、マニ教文獻、ロンドン寫本には一例も確認されない點で重大な相違があり、*n* 言語＝「西突厥言語」説には議論の餘地が残されているように思われる。

なお「閼羅王經のトルコ語本は知られていない」(五六頁)とあるが、「閼羅王經(十王經)」のトルコ語譯は、ガバイン氏やツィエ氏の研究によって夙に知られているところである (Peter Zieme, Old Turkish Versions of the "Scripture on the Ten Kings". In: Giovanni Stary (ed.), *Proceedings of the 38th Permanent International Alaisic Conference (PIAC)*, Kawasaki, Japan, August 7-12, 1995, Wiesbaden, 1996, 401-425.)。

二

第2章第1節ではトルコ語「八陽經」の校定テキスト、校異、和譯が提示される。本書の中核となる部分である。

前述のごとくトルコ語「八陽經」のテキストは四種類に分類される。校訂テキストはロンドン本の行数に合わせて他の三つのテキストが對應するように並置される。さらに漢文テキストは文節ごとに一〇一〇番からナンバリングされ、トルコ語テキストと和譯とにその番號を挿入し、參照に便宜を圖っており、まことに周到な配慮というべきである。今後同じ性格のテキストを公表する者にとって大いに參考となるにちがいない。もし事情が許せば、見開き左頁にテキスト、右頁に翻譯と原文を配置していただけるとさらに便利であった。

また「圖版・資料編」にはII c、II dを構成するテキストが斷簡ごとに提示されており、校訂テキストに對應する斷簡を確認したい場合、第2章第6節「寫本・版本諸表」から遡及することが可能となっている。圖版はブラフミー文字・チベット文字資料以外の全ての寫本が掲載されていて便利である。とくにフランス、ロシア所藏資料の鮮明な寫眞はありがたい。

翻譯は、テキスト間の異同がわかるよう體裁が整えられている。できるだけ羽田譯を尊重しつつ、修正が加えられる。また佛教術語の使用をなるべく避けて、トルコ語に忠實に翻譯する姿勢がとられる。そのためか一般の讀者にはトルコ語と漢文の對應關係がはっきりしない部分も見受けられた。例えば、ロンドン本（七六・七七行：漢文テキスト一四七）：*adgu ögü (köngu) yrtıqıncı*

köngu ögrınc köngu tız köngu 漢文：「慈悲善捨」に對應する。小田譯では「善友（善友心）、慈悲心、歡喜心、平等心」と翻譯し、*adgu ögü (köngu)*を「善友」、*yrtıqıncı köngu*を「慈悲」とする。一般に「慈悲」は一つの術語として熟しているが、四無量心の場合は「慈Skt. *maitrī*」と「悲Skt. *karmā*」とを區別する。したがってこの場合、*adgu ögü (köngu)*が「慈」に、*yrtıqıncı köngu*が「悲」に對應するので、そのように翻譯すべきであった。たしかに *adgu ögü*は「善友」、「善知識」に對應する例が多くみられるが、トルコ語譯「慈悲道場懺法」では *adgu ögü*が「慈」、*yrtıqıncı köngu*が「悲」に對應する例がある（Jens Wilkens, *Das Buch von der Sündentilgung. Edition des alttürkisch-buddhistischen Ksanti Kulguk Nom Bıng*, Berliner Turfantexte XXV, Turmhout, 2007）。ちなみに *tız köngu*「平等心」は「捨Skt. *upeksā*」の本質を意譯したものである。

第2節、第3節にて紹介される注釋書（一點）と識語資料（一點）は、評者にはとくに興味深く感ぜられた。以下このうちの二點について私見を述べることをお赦しいただきたい。

まず「八陽經」注釋書斷片（D 106）は、ツイーメ氏によって見出され、小田氏に研究が託されたものである。「八陽經」注釋書の漢文資料はこれまで確認されておらず、それだけに「八陽經」の研究にとって貴重な資料である。小田氏は、これをウイグル人の著述と推測する。評者は、以下に挙げる注釋形式に注目する。「我らは守護すべし。あらゆる種類の惡から衆生を去らしめよ。危害なくあらしめよ」（以上「八陽經」本文。評者注）ということをもって、諸菩薩、自身が申しあげた陀羅尼呪の威力に

において、すなわちこの世界にいる衆生が病氣なく危害なく居ることを「經典」は解せしめる。このように解せしめるかといえば…… (kyñ küñäñ tuahm kim alqu töñüg aŧyda kizñinlar adasız tudasızın arñınlar tıp tınak üzä alqu bodıstc-lar kññ-ları ötümis dani arñıs küñnı öññ bo yıññıñdıkı tññ-lar : ıgısız kñmsız adasız bolmañın uñtur : nñññın uñtur tıp tñññ)」。まず經文を提示した後、次にその經文が説かんとする内容を「解せしめる」(ı uñtur)という言葉で示し、最後にそれをどのようにに理解させるのか(nñññın uñtur)説かれる。この注釋形式は、トルコ語「妙法蓮華經玄贊」(百濟康義「妙法蓮華經玄贊のウイグル譯斷片」、護雅夫編「内陸アジア・西アジアの社會と文化」、一九八三年、一八五—二〇七頁)をはじめとする唯識文獻とも共通する注釋形式であり、今後ウイグル佛教界における學派、翻譯グループの研究にとっても重要な資料となるであろう。

次に識語(9-1)は、バラト氏によって報告された資料である(Kahar Barat, *Šinggo Šali Tutung traducteur du Sakiz Yulmak Yaruq Nom?*, *Journal Asiatique* 278, no.1-2, 155-166)。そこには「八陽經」の翻譯者としてシンコ・シェリ・トゥトゥング(*Šinggo Šali Tutung*、勝光闍梨都統)の名が挙げられている。勝光都統は、十世紀から十一世紀にかけて活躍し、『大唐大慈恩寺三藏法師傳』、『金光明最勝王經』、『千手千眼觀世音菩薩大圓滿無礙大悲心陀羅尼』、『身體と心を觀する經 *añññing kongññing körmäk allıg nom bing*』を翻譯したことで知られている。問題の資料には、斷片的ながら改譯本のトルコ語タイトルの一部を確認でき、さらに「八陽經」が「菩薩大唐三藏」という名の法師に

よりインドの言葉から中國の言葉に翻譯されたとある。名前は記されないが、古トルコ語資料で「大唐三藏 *tayto samto*」と稱されるのは玄奘のみである。『大日本續藏經』のように、「八陽經」の翻譯者を義淨とする例もあるが、敦煌寫本(A本)は、翻譯者を玄奘に假託する(本書三七、七三頁参照)。したがってこの「大唐三藏」は玄奘を指していると思われる。勝光都統は「慈恩傳」を翻譯していることからわかるように、法相宗と繋がりのある僧であつたようである。勝光都統翻譯説の眞偽に關わらず、トルコ語「八陽經」の翻譯者に勝光都統が挙げられる理由も、玄奘を「八陽經」の譯者に假託する傳承に求めることができる。小田氏は、本書では識語の内容に慎重な態度をとるが、一方で「八陽經」の譯者にもそのシングコ・シェリ・トゥトゥング説が起るのは、改譯本に關するのかもしれない」と指摘している(小田壽典「トルコ語佛教寫本に關する年代論—八陽經と觀音經—」、『東洋史研究』五九—一、二〇〇〇年、一五〇頁)。この點に注目するラシュマン氏によってトルコ語「八陽經」と勝光都統が翻譯した作品の用語を比較検討する研究も進められていることを付け加えておきたい。

おわりに

最後に、本書に反映されていないか、もしくは本書が上梓された後に報告されたトルコ語「八陽經」研究について紹介しておきたい。

まず、敦煌北區の調査により出土した一點の版本「八陽經」の斷片がヤクップ氏により報告されている(Abdurishid Yakup,

Uigunica from the Northern Grottoes of Dunhuang. *A Festschrift in Honour of Professor Masahito Shogaito's Retirement: Studies on Eurasian Languages*, 2006, pp. 1-41). *ウイグニク*の石窟からも二點の版本資料が出土している(張鐵山「吐魯番柏孜克里克出土回鶻文刻本《佛說天地八陽神呪經》殘頁研究」、『敦煌學輯刊』二〇一一年第二期、二八—三四頁)。このうちの一點は、本書で紹介された二種類の版本とも異なる版式のようであり、改譯本(I d)の缺落部分を補ってくれる。

そして本書で最も多くの資料が利用されたブランデンブルグ科學アカデミー・トルファン研究所に保管される約二五〇點のトルコ語「八陽經」資料については、ヤクップ氏によって古トルコ語版本「八陽經」が網羅されており(Abdurishid Yakup, *Altürkische Handschriften. Teil 12: Die uigurischen Blockdrucke der Berliner Turfansammlung. Teil 2: Apokryphen, Mahayana-Sūtren, Erzählungen, magische Texte, Kommentare und Kolophone*, VOHD, 13.20, Stuttgart 2008) *ウイグニク*に寫本情報を加えたカタログが、ラシユマン氏によって出版された(Simone-Christiane Raschmann, *Altürkische Handschriften. Teil 18: Buddhica aus der Berliner Turfansammlung. Teil 1: Das apokryphe Sūtra Sakiz Yakmuk*, VOHD, 13.26, Stuttgart, 2012)。とくに後者のカタログには、本書の成果が十分に活用されていることは言うまでもない。ラシユマン氏はベルリンの「八陽經」全資料を見直す過程で、新たに「八陽經」と判明したもの、接合する断片を相當數見出している。これまで貝葉形の寫本と考えられていたものが、接合することによって糊蝶装であることが判明した例などは特に重要で

ある。本書と併せて参照していただきたい。

今後も「八陽經」の資料は漢語、トルコ語を問わず、その數を増していくことが豫想され、本書で示されたテキストに補足、修正を要する箇所がでてくることは避けられない。しかしそれによって本書の價値が失われることは微塵もない。むしろ、その研究方法において、トルコ語佛典研究、とくに長期間にわたって傳承され、複数のテキストが存在する經典の校訂を志す研究者にとつて指針となるのが本書である。

また小田氏が「八陽經」とならんで重要視し、研究を繼續している作品にトルコ語「觀音經」がある。これも「八陽經」と同様に古譯と改譯の存在が確認されており、包括的な校訂テキストの作成が求められているものである。近い將來、その研究が小田氏によって報告されることを鶴首しつつ、まずは本書の出版を心より慶びたい。

註

- (1) 近年、日本の學界ではトルコ共和國で使用される言語と區別するために、それ以外の地域の系統を同じくする言語を「チュルク語」あるいは「テュルク語」とすることが慣例化している。しかし本書のタイトルが示すとおり、著者は過去に發表した論考から一貫して、對象とする資料の言語を「トルコ語」と稱する。本書七九頁(注35)の説明によれば、佛典の識語資料では、自身の言語を「トルコ語 *türk til*」、「ウイグル語 *uğur ur til*」、「トルコ・ウイグル *türk-ugur ur til*」と記すものがある。小田氏は「ウイグル

語」という表現は、元朝期以降に使用されはじめた呼稱であり、それ以前にみえる「トルコ語」と區別し、用語の混亂を避けるため、「古トルコ語」の意味も含ませて「トルコ語」の呼稱を用いると説明する。本書を評するにあたり、この呼稱に従いたい。

二〇一〇年五月 京都 法藏館

B5版 「研究編」 viii+三九九頁、

「圖版・資料編」 iii+一八七頁+三二〇圖版

二一〇〇圓